

日本語学習者の母語が主語名詞句の導入に与える影響 ——作文におけるハとガの使用から——

遠山 千佳

要旨

本研究では、英語、中国語、韓国語を母語とする日本語学習者、日本語母語話者の作文を対象に、ハ及びガで標示される主語名詞句が談話にどのように導入されるのか、Givón (1983 他) による指標「指示距離 (RD)」を用いて分析した。その結果、(1) 母語のトピック表現手段が日本語に近いと、1 作文内のハとガの使用頻度の割合も日本語母語話者と近くなること、(2) 学習者の作文では、指示距離とハ名詞句、ガ名詞句の関係が日本語母語話者ほど明確でないこと、(3) トピック性が高くなる名詞句は、有生性よりテーマが優先される可能性があることが示された。以上のことから、類型論的に異なる言語を母語とする学習者はハとガの使い分けが遅れる可能性、また、母語にかかわらず、ハが談話全体に機能し、ガがその下位の命題内で機能するというハ／ガと文脈との関係の把握が難しいことが示唆された。

キーワード：トピック性、談話、機能的類型論、談話（テキスト）語用論、定量的分析

1. はじめに

主語名詞句をハとガのどちらで標示するのが自然か、超級レベルの日本語学習者にとっても難しいことがある。文の主語を主語マーカーのガ

で標示するか、ハによって主題化して標示するか、話し手（書き手）は、述べようとしている情報が、聞き手（読み手）とどの程度共有されているのかを想定し、一貫性のある談話を展開しなければならない。しかし無数に存在する文脈において、主語名詞句にハとガの2つの形式が付き、それぞれに可視化できない話し手の意図という語用論的意味がマッピングされているため、日本語学習者は、主語名詞句をハとガのどちらで標示すれば自分の意図をより十分に伝えられるかを、推測によって習得していかなければならない。

文法的には、ガは主語を表し、ガを主題化するとハになる。したがって、ハとガは、主題と非主題という対立になる（野田, 1996）。しかし、「トピック¹⁾とは何か」という問題は議論され続けているにもかかわらず、明確に述べることは難しい（Givón, 1988; Myhill, 1992; Odlin, 1989）とされており、また、トピックの機能は言語によって非常に異なることが示されている（益岡, 2004）。「ハはトピックで、ガは主語を示す」という説明を学習者が知っていたとしても、トピックの機能が日本語と母語で違う場合、学習者が日本語母語話者と同じように主題と主語を捉えているとは限らない。八木（2000）では初級学習者の作文を対象として分析とフォローアップ・インタビューを行っており、学習者がトピックや主語という概念を理解しているとは限らず、ハが主語とトピックの両方を表わす機能として捉えられている可能性があるとしている。日本語学習者にとって「ハは主題を示す」という説明は、それでは「主題（トピック）」とは何かという循環的な問題を生じさせる可能性がある。

Li & Thompson（1976）は主語とトピックのどちらが卓立しているかを比較し、主語が必須の主語卓立型（英語など）、トピックがコード化されるトピック卓立型（中国語など）、主語とトピックの両方がコード化される主語・トピック卓立型（日本語、韓国語など）、主語もトピックも卓立しない型（タガログ語など）の4つに世界の言語を類型論的に分類し、

主語とトピックが談話内でどのようにコード化され、卓立しているかが言語によって異なることを示している。また野田（2004）は主題を表す手段に音声的手段、文法的手段、形態的手段があるとし、言語によってトピックの表現方法が異なるとしている。トピック化に形態的手段を主に用いる日本語においては、古くから情報の流れがハヤガの助詞で語られてきたのに対し、トピック化に音声的手段を主に用いる英語では、情報の流れがイントネーション・ユニット、アクセント・ユニットという韻律との関係で述べられる（Chafe, 1993）ことがあるのは、トピックのコード化の手段の違いからくる一つの現れであると考えられる。

以上のように、類型論的にトピックの捉え方が異なる言語を母語とする学習者にとって、ハとガの使用は、主題と主語という説明だけでは理解が難しい可能性がある。

「情報の流れ（information flow）」によって、ある指示対象がトピック化するかどうかを論じた Chafe（1993, 1987）は、トピックを話し手と聞き手の意識の動きとして捉えている。Chafe は旧情報と新情報という用語を、それぞれ「既に活性化している」情報（active concepts）と「まだ活性化していない」情報（inactive concept）のように、意識レベルの認知的側面から定義し直し、更に先行文脈では現れていないが、長期記憶の中から喚起することが可能な「準活性化（semi-active concepts）」状態の情報が存在するとしている。活性化および準活性化されている情報はトピック化できる情報であるが、不活性化状態の情報が突然トピック化された場合は、聞き手（読み手）の理解に支障が生じたり談話の一貫性や結束性が途切れたりすることになる。Chafe の情報の流れの概念は、話し手と聞き手の間で心的に何が起きているかを、静的な文の分析ではなく、認知的プロセスとして動的に展開していくものとして捉えること（Chafe 1987）を可能にする。

このような情報の状態を認知的観点から数値化することを提言したの

が Givón (1983 他) である。Givón (1988) は、談話における名詞句を、想起のしやすさ、注意の量という段階的な心的パラメーターを用いて、談話における「トピック性 (topicality)」を数量的に示すこと (discourse measurements of topicality) を提唱している。具体的なパラメーターは、先行文脈の同一指示語との連鎖 (topic continuity) の程度を示す「指示距離 (RD:Reference Distance)」、トピックの重要性を示す「トピックの持続性 (TP:Topic Persistence)」という 2 つの指標である。Givón (1983) は、これらの心理学的指標を用いた研究結果から、類型論的に異なる言語の「トピック性」について、どのような名詞句が連鎖性があり、トピックとなりやすいか、その普遍性を考察している。

このような Chafe や Givón による情報の活性度という心的側面からの理論は、コミュニケーションを構築していく上で生じる、談話内の条件や文脈の流れの動機を究明するテキスト語用論 (Bekeš, 1995) としての捉え方であり、談話における参加者同士の関係や立場等の環境的文脈も含め、どのような状況でトピックが生起していくかを論じるものである。日本語の談話においても、テキスト語用論的立場から、主題と主語がそれぞれ具体的にどのような文脈でどのように導入されるのか、そのパターンを提示することは、超級になっても難しさが残ることのある、談話におけるハとガの習得の足がかりになると考えられる。

そこで本研究では、実際に産出された作文データを分析し、類型論的に異なる母語をもつ学習者がハとガの使用をどう捉えているか、その難しさがどこにあるかを探る。そのために、談話におけるハ名詞句²⁾とガ名詞句の使用を、情報の活性度という意識の面から捉え、数量的特徴の分析を用いて、日本語学習者のハとガの使用への示唆を得ることを目的とした。

2. 先行研究

2.1 トピック性 (topicality)

Givón (1983, 1995 他) の提唱した「トピック性」を数値化するための指標には2つある。1つは「指示距離 (RD)」で、記憶に関わる指標として、ある名詞句の同一指示語が先行文脈のどこに出現していたか (前方照応) を示し、トピックとしてどの程度認識しやすいかを示す。もう1つは「トピックの持続性 (TP)」で、注意の量が関わる指標として、対象名詞句が後続の文脈にどのくらいの頻度で出現するか (後方照応) を示し、その指示対象のトピックとしての重要性を測る指標となる。以上のように、これらの指標は、記憶や注意の量に関わるとされているが、直接的に認知的側面を意味するものではなく (Givón, 1989)、トピック性を直接評価するものでもない (Givón, 1995)。しかし数量的な特徴を手がかりとし、課題発見を促す指標となる (Givón, 1984, 1995) とされている。

Givón の指標を用いた日本語研究として、Bekeš (1995) が朝日新聞に記載されたニュース記事を対象として、助詞のハについて分析している。ニュース記事は、誘拐・殺人事件で逮捕された人物 M の容疑について、犯行当日、M の友人が M に待ち合わせを断わられたいきさつ、その後の M の様子、被害者の行動、県警本部が推察する M の当日の行動が述べられており、人物の行動が中心の文章である。Bekeš は、各指示対象の頻度、「人間」「有生」「無生」³⁾ という有生性 (animacy)、「指示距離」に着目し、分析を行った。その結果、指示対象の頻度がトピック性を示す指標となること、ハの使用そのものは有生性と相関が認められないものの、「無生」の名詞句には格助詞が使用されることが多いことから、結果としてトピック化と有生性は相関関係をもつこと、指示距離が指示対象の探索のしやすさと結びつくことが示された。このことは、Givón の指標による数値が、直接的ではなくても日本語の談話において、トピック性を表す指標となっ

ていることを示唆している。

2.2 情報処理からみたトピックの2つの観点

砂川 (2005) は、談話の主題には、Givón (1983) や Chafe (1987) のような談話を進行過程における「指示対象」に注目して情報処理するのとは別に、これまで理解した内容を思い起こし、何がどのように語られたかを確認するテキスト解析の処理があるとしている。テキスト解析の処理では、階層的な個々の命題の上位に位置づけられる命題が談話のトピックとなるとされている。メイナード (2004) においても、談話のトピックは、句または命題の形で表現される枠組みで、その枠組みに情報が関係づけられるもの、またはその枠組み内に命題が当てはまるものの場合と定義されている。また、Langacker (2008:516) は、主語とトピックの違いについて、主語が構造的に内的であり、概念的に内在的であるのに対し、トピックは聞き手に対して、命題を解釈するための適切な知識領域を伝達する働きを備えているとしている。主語はこの命題に内在している。これら砂川、メイナード、Langacker の理論は共通して、トピックは談話を通して情報レベルで機能していく枠組みであり、その枠組み内に主語が内在しているという関係を示している。

砂川は、「指示対象」に着目する場合は、主題と主語の関係を過程的・局所的な情報処理が絶えず行われるという認知プロセスとして捉えているのに対し、情報と命題の構造に注目した場合は、遡及的・大局的に情報処理が行われると捉えられているとしている。その上で、この2つの情報処理が相互依存的にかかり合って、談話が深く理解されたり、表現されたりするとしている (p.24)。つまり我々は進行中の談話における情報の活性化状態を処理すると同時に、これから構築しようとする談話も含めた談話全体にも注意を払い、トピックを導入したり、維持したり、終了したりすると考えられる。

本研究では、指示対象に注目し、過程的・局所的な情報処理の分析を行うが、遡及的・大局的な処理が関わっていることにも留意する必要がある。

2.3 第二言語 (L2) の談話における名詞句の導入

では、母語とは異なる体系をもつ第二言語の談話において、学習者はどのようにトピックを操作していくのであろうか。

Givón (1984) は、韓国語、フィリピン諸語、スペイン語の母語話者による英語 (ハワイビジン) の発話データを「指示距離 (RD)」を用いて分析した。その結果、ゼロ照応、代名詞、右方転移、左方転移などの主語の表現別に RD 値をグラフ化すると、全ての言語の RD 値が本質的に並行していることが示された。このことから Givón は、母語の類型論的違い、一人で語ったもの (narrative) か複数人数による会話 (conversation) かというジャンルの違い、インタビュー方法やインタビュアーの違い、対象者の文化や性格、英語の流暢さの違いを超えて、トピックの連鎖の仕方に類似性が見られるとしている。Givón はその類似性を分析し、「連鎖的で予測しやすいトピックほど短く標示され、非連鎖的で予測しにくいトピックほど長く標示される」としている (p.126)。つまり、指示対象とその同一指示語が先行文脈の近いところに出現していて予測しやすい場合は、短い標示でも明確に指示されるのに対し、先行文脈の近いところに同一指示語が見当たらず、何のことか予測しにくい場合は、相手にわかるように長く表現してトピックを示さなければならない。その標示の大きさとトピックの連鎖性の関係は、具体的に以下のように示され、左の表現ほど先行文脈とのトピック連鎖性が強い。

ゼロ照応 > 強勢のない代名詞／動詞の一致 > 独立代名詞／強勢のある代名詞 > 完全名詞句 (full NP) ⁴⁾ > 繰り返された完全名詞句 (Givón, 1984:126)

最も標示が小さくトピックの連鎖性が高い表現がゼロ照応となる。

Sasaki (1997) は、Givón の指標を用い、英語学習者の発話におけるトピック連鎖を分析している。Sasaki は、アメリカ在住の日本語母語話者 1 名を対象に行ったインタビューデータを英語学習者データとし、先行研究の日本語母語話者と英語母語話者による発話データとともに、ゼロ照応、代名詞、完全名詞句の 3 種類の名詞句の頻度、「指示距離 (RD)」、 「トピックの持続性 (TP) ⁵⁾」について比較を行った。その結果、主語名詞句のうち、代名詞の頻度の割合が、英語学習者と英語母語話者はどちらも 60% 前後でほぼ同じ頻度であったのに対し、日本語母語話者は 7.1% のみであった。一方、ゼロ照応については、日本語母語話者の頻度が 65.8% で高いのに対し、英語学習者は 1.8%、英語母語話者は 15.8% と低い値を示していた。このような結果が表れたのは、英語が主語卓立型言語 (Li & Tohmpson, 1976) で主語をゼロにはできないのに対し、日本語ではゼロ照応が可能であるという母語と目標言語の言語類型論的特徴の影響を受けていると考えられる。Sasaki が対象とした英語学習者のトピックの導入の仕方は、どちらかというとも英語母語話者のシステムに近いものの、日本語からも英語からも独立した学習者独自のシステムをもっているとされている。

Jarvis (2002) は、フィンランド語とスウェーデン語を母語とする英語学習者を対象に、記述データを用い、冠詞の使用・非使用のパターンから、新情報、継続中の情報、再導入された名詞句⁶⁾ のトピックの連鎖性を分析した。その結果、冠詞の使用・非使用のパターンは、母語において新情報、継続中の情報、再導入された名詞句の区別が義務的か義務的でないかという違いに影響を受けていることが示され、母語の影響があることを示している。

以上のように、学習者の談話におけるトピックの導入の仕方は、名詞句の種類、冠詞の種類など様々な面から観察されるが、そのパターンに

は母語が影響している可能性、学習者独自のシステムが作られている可能性がある。日本語学習者については現在のところ、情報の活性化の度合いや注意の量など認知的な観点から、主語名詞句の導入の仕方に関する習得プロセスの分析を行った研究はほとんどない。日本語学習者が談話の中にハとガをどのように導入していくかという認知的な側面からの実態を母語別に把握することは、日本語能力のレベルが上がっても難しさが残り、明示的な説明の難しいハとガの使い分けの判断の一助となると考えられる。

3. 研究課題

本研究では、日本語学習者の談話におけるハとガの使用の実態を探るために、ハ名詞句とガ名詞句の頻度、及び名詞句のタイプ別に観察を行った。名詞句のタイプは、Bekeš (1995)、Chaudron & Parker (1990)、Givón (1984, 1988)、Sasaki (1997) を参考に、指示代名詞句、指示詞+名詞句、完全名詞句という名詞句の種類別、及び有生性別の、2つのタイプを取り上げ、それぞれの主語名詞句が談話にどのように導入されているか、先行文脈との連鎖性の分析を行った。研究課題は以下の通りである。

【課題1】学習者の母語（英語、中国語、韓国語）は、日本語作文におけるハ名詞句、ガ名詞句の頻度に影響を与えるか。与えるとしたらどのような影響か。

【課題2】種類別（指示代名詞、指示詞+名詞、完全名詞句）にみた、ハ名詞句とガ名詞句の「指示距離（RD）」は、母語によって違いが見られるか。違いが見られるとしたら、どのような違いか。

【課題3】有生性別にみた、ハ名詞句とガ名詞句の「指示距離（RD）」は、母語によって違いが見られるか。違いが見られるとしたら、どのような

違いか。

4. 研究方法

4.1 データ

データは「作文対訳 DB (国立国語研究所)」⁷⁾ から、日本語学習者の母語として多い、英語、中国語、韓国語を母語とする執筆者の日本語作文を分析対象とした。また、ベースラインとして、日本語母語話者の作文も分析対象とした。Li & Thompson (1976) の主語とトピックのどちらが卓立しているかという分類では、英語は主語卓立型、中国語はトピック卓立型、韓国語は日本語と類似している主語・トピック卓立型である。野田 (2004) では、トピック化の主な表現手段として、英語はトピックの後にポーズをおいたりイントネーションを利用したりする音声的手段、中国語は文頭にトピックをおき、語順によってトピックを標示する文法的手段、韓国語と日本語は助詞のような標識で標示する形態的手段が主に使用されるとしている。Li & Thompson (1976) と野田 (2004) による言語類型論的特徴をまとめると、表 1 のようになる。

表 1 対象者母語の言語的類型論

	主語とトピックの卓立性 (Li & Thompson 1976)	主に用いられるトピック化手段 (野田 2004)
英語	主語卓立型	音声的手段
中国語	トピック卓立型	文法的手段 (語順)
韓国語	主語・トピック卓立型	形態的手段 (標識)
日本語	主語・トピック卓立型	形態的手段 (標識)

次に「作文対訳 DB」から「あなたの国の行事について」をテーマとした作文を抽出し対象とした⁸⁾。このテーマの作文は、子どもの頃から現

在まで心に深く刻み込まれた順序性（時系列性）のある経験を述べたものであるため、作文を書くための内容的な認知的負荷が低いと考えられる。作文数は、英語母語話者 22 本、中国語母語話者 43 本、韓国語母語話者 43 本、日本語母語話者 22 本で⁹⁾、全て母語が話されている国¹⁰⁾で採集されたものである。作文執筆者¹¹⁾には母語以外の言語を話す者もいるが、対訳作文を母語と同じ言語で書いている対象者のみを抽出している。抽出された作文中、分析対象とした主語名詞句数は、ハ名詞句 1,039（英：157、中：521、韓：229、日：132）、ガ名詞句 333（英：29、中：97、韓：132、日：75）である。

作文の長さは、自由作文のため、日本語母語話者でも文字数にばらつきがあるが、学習者、日本語母語話者とも平均的には 400 字詰め原稿用紙 2 枚になる長さである。ただし、分散分析の結果、英語母語話者の作文の平均文字数は、中国語話者、韓国語母語話者、日本語母語話者の平均文字数より、5%の水準で有意に短かった。

4.2 分析方法

データの分析は、以下の①～⑥の手順で行った。

①データから主語名詞句をハ名詞句とガ名詞句に分けて抽出した。その際、Jarvis (2002)、Nakagawa et al. (2010)、Sasaki (1997) を参考に、以下の 6 項目については分析対象外とした。() 内はその理由である。

・「～ガ／ハ好き」のように対象を表わす「目的格 (久野 1973)」。(主語名詞句を対象とする。)

・名詞修飾節内の主語、従属節内の主語で主節と異なる主語。(ハとガの使い分けに文法的制約が生じる可能性がある。)

・引用句内の主語名詞句。(引用部分が前後の文脈とは異なる文脈における談話である。)

・疑問詞。(照応がない。)

- ・否定文の主語名詞句。(文法的制約が影響する可能性がある。)
- ・一人称の主語名詞句。(一人称は書き手として常に活性化状態あるいは準活性化状態の情報である。)

②ハ名詞句、ガ名詞句の頻度を測定する。

③ハ名詞句、ガ名詞句の RD を測定する。RD は、対象とする名詞句と同一指示語が先行文脈中、何節前に出てくるかを測定した。本研究では、述語を1つ含み、主語・述語関係を中心とする文成分の集合を1節 (clause) とした。ただし、連体修飾節は、その位置により1つの節を2つ以上に分断してしまうことがあるため、1つの名詞句内のものとして扱った。

また、直前の節に同一指示語が現れた場合を RD=1 とするが、Givón (1983) は、RD の値は短期記憶が重要な心理学的相関性をもつとし、最高値を RD=20 としている。本研究でもそれにしたいが、先行文脈中の同一指示語までの距離が20節以上の場合、あるいは出現しなかった場合は RD=20 とする。したがって $1 \leq RD \leq 20$ となる。

節の中の省略されている主語名詞句は、RD を数える際にのみ復元して数えた。また、<1> は、ハ名詞句 (「秋夕ハ」「韓国人ハ」) とガ名詞句 (「まつりが」「人たちが」) の RD の測定例である。「伝統的なまつり」と「秋夕」のように表現そのものが異なっても同じものを指す場合は同一指示語とした。逆に同じ表現でも指しているものが違う場合は、同一指示語として認めていない。

<1> 毎年、陰暦の 8 月 15 日に になったら、 / '秋夕' チョンという韓国の 伝統的なまつりが ^{RD=20} あります / 秋夕は ^{RD=1} 韓国の 最大の 伝統的な まつりで、 / おおぜいの ^{RD=20} 韓国人は 毎年 ^{RD=1} この日を 待っています。 / 特に秋夕は ^{RD=1} ふるさとを 去って ^{RD=20} でかせぎを している ^{RD=20} 人たちが ^{RD=20} ひさしぶりに 帰郷をする ととても 特別な日です。 / (KR-111 より一部抜粋, 一部加筆。)

* 「/」: 節の終わり

なお、ハ名詞句、ガ名詞句とも、主語名詞句であることの確認が必要であること、1つの指示対象が異なる名詞句によって表現されている可能性があること、1つの名詞句が異なる指示対象を示す可能性があることという理由から、一律一斉的な検索及びコーパスツールの使用は行わず、個々の作文の文脈を理解した上で、指示対象語の同定、同一指示語の判断を行った。

④抽出した名詞句を、完全名詞句、指示代名詞句、指示詞＋名詞句に分類し、それぞれについて、母語別に RD の値を算出し、平均値および分布の状況を比較する。

⑤完全名詞句、指示代名詞句、指示詞＋名詞句の各名詞句について、人物、有生、無生に分類し、母語別に RD の平均値および分布の状況を比較する。

⑥算出した値を比較する際、必要に応じて t 検定、及びピアソンのカイ二乗検定を行う。多重検定になる場合はボンフェローニ補正を適用し、有意基準を厳しくする。

5. 結果と考察

5.1 ハ名詞句とガ名詞句を使用した作文数

作文から抽出されたハ名詞句とガ名詞句のうち、ハ名詞句の割合と作文数を表 2 に示した。英語母語話者は 22 作文のうち 8 作文 (36%)、中国語母語話者は 43 作文のうち 12 作文 (28%) において、主語名詞句にハのみを使用していた。それに対し、韓国語母語話者では 43 作文のうち 3 作文 (7%)、日本語母語話者では 22 作文中 1 作文 (5%) が主語名詞句にハのみを使用し、90% 以上の作文でハとガの両方を用いていた。英語母語話者と中国語母語話者のハのみ使用した作文数は、日本語母語話者より有意に高かった (英 $\chi^2=14.65$, $P=.000$, 中 $\chi^2=30.25$, $p=.000$)。本研究の対象とした原稿用紙 2 ページ程度の作文を書くレベルでは、主語名詞

表2 ハ名詞句の割合と作文数

ハの割合 (%)	英語母語	中国語母語	韓国語母語	日本語母語
	% (作文数)	% (作文数)	% (作文数)	% (作文数)
100	36 (8)	28 (12)	7 (3)	5 (1)
90-99	18 (4)	19 (8)	0 (0)	0 (0)
80-89	14 (3)	19 (8)	19 (8)	18 (4)
70-79	5 (1)	19 (8)	26 (11)	18 (4)
60-69	9 (2)	12 (5)	7 (3)	27 (6)
50-59	9 (2)	2 (1)	16 (7)	27 (6)
40-49	9 (2)	0 (0)	5 (2)	0 (0)
30-39	0 (0)	2 (1)	9 (4)	5 (1)
20-29	0 (0)	0 (0)	7 (3)	0 (0)
10-19	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
1-9	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
0	0 (0)	0 (0)	5 (2)	0 (0)
合計	100 (22)	101 (43)	101 (43)	100 (22)

句にガが使えないレベルとは考えにくく、ハのみを使用した対象者は意識的か無意識的かは別として、主語名詞句にハを選択して使用したと考えられる。

また、主語名詞句にハとガの両方を使用している作文が、どの程度ハ名詞句を使用しているかを見ると、英語と中国語の母語話者は、ハ名詞句の割合が高い作文ほど作文数も多い。一方、韓国語の母語話者はハ名詞句の割合が70%代である作文が最も多く、次に80%代、続いて50%代であり、50～80%代に68%が集中し、それ以外は広く分散している。日本語母語話者は50～60%代が最も多く、続いて70～80%代と続き、ハ名詞句の割合は50～80%代で90%を占めている。

トピックの表現手段として、英語は主に音声を、中国語は主に文法的手段（語順）を使用する言語であり、韓国語と日本語は、主に形態的手段（標識）を使用してトピックを表す言語である。母語におけるトピック化の主な手段が形態的手段ではない英語と中国語を母語とする学習者は、主語とトピックのどちらが卓立する言語類型かにかかわらず、主語

名詞句をハで標示する傾向が見られた。

それに対して、日本語とトピックの表現手段に近い韓国語母語話者の1作文内におけるハの使用率は、日本語母語話者の使用率と分布の形が似ており、母語の正の転移の可能性が考えられる。しかし日本語母語話者では1作文中のハ名詞句の割合が40%以下になることがほとんどないのに対し、韓国語母語話者では26%（11作文）が40%以下にも分布しており、完全に同じ傾向を示しているわけではない。

5.2 指示距離 (RD)

5.2.1 名詞句の種類別にみた指示距離

次に、指示代名詞、指示詞+名詞句、完全名詞句という種類別にみたハ名詞句の頻度と指示距離 (RD 値) の平均値を、各母語別に表3に、ガ名詞句の場合を表4にまとめた。指示距離の平均は、ハ名詞句・ガ名詞句とも母語にかかわらず、指示代名詞、指示詞+名詞句、完全名詞句の順でRD値が小さく、RD値が小さいほど先行文脈との連鎖が強いことを

表3 ハ名詞句の種類別にみた平均指示距離 (RD)

母語	指示代名詞		指示詞+名詞句		完全名詞句		合計 頻度
	頻度	平均	頻度	平均	頻度	平均	
英語	3	1	8	1	146	9.2	157
中国語	32	1	19	4.2	470	9.1	521
韓国語	13	1	9	3.5	207	8.7	229
日本語	15	1	11	1.8	106	7.5	132

表4 ガ名詞句の種類別にみた平均指示距離 (RD)

母語	指示代名詞		指示詞+名詞句		完全名詞句		合計 頻度
	頻度	平均	頻度	平均	頻度	平均	
英語	1	1	1	1	27	14.1	29
中国語	1	1	0	-	96	13.9	97
韓国語	3	1	5	4.8	124	14	132
日本語	2	1	2	1	71	17	75

示している。指示代名詞は名詞を含まないため、指示対象を探索するためには、直前の文脈に同一指示語がある必要がある。そのため、先行文脈との連鎖が最も強くなると考えられる。RD 値が次に低い「指示詞+名詞句」は、指示詞が何を指しているかを同定するためには、やはり近い先行文脈に同一指示語がある必要があるが、名詞句が含まれているため、指示代名詞より探索がやさしいと考えられ、少し離れた先行文脈に同一指示語があっても探索可能であると考えられる。つまり指示語の機能が助詞のハヤガよりも優先され、先行文脈との連鎖性が強められると考えられる。一方、完全名詞句は、意味語である名詞のみで構成されているため、後置されるハヤガが先行文脈と指示対象語との関係を表現していると考えられる。

そこで、指示代名詞と指示詞+名詞句を除き、完全名詞句について、ハ名詞句とガ名詞句の RD 値の平均を母語別に比較すると、母語にかかわらず、ハ名詞句はガ名詞句より指示距離が短い（すべての母語において5%水準で有意差あり）。これはハ名詞句のほうが先行文脈との連鎖性が平均的に強いことを意味し、ハ名詞句がガ名詞句よりトピック性が高いことを日本語母語話者だけでなく、学習者も認識していることが示されている。

しかし、ハ名詞句もガ名詞句も学習者群は母語にかかわらず RD 値が近い値を示しているのに対し、日本語母語話者は全ての母語の学習者よりハ名詞句の RD 値が有意に低く（全ての母語と5%水準で有意差あり）、ガ名詞句の値が有意に高い（英語と韓国語の母語話者とは5%水準、中国語母語話者とは10%水準で有意差あり）。その差は日本語母語話者が9.5であるのに対し、学習者は、英語母語が4.9、中国語母語が4.8、韓国語母語が5.3であり、日本語母語話者の約50%である。このような違いがなぜ生じているのかを明らかにするために、ハ名詞句とガ名詞句の RD 値の分布を母語別に示したのが表5、表6である。表5から、母語に関ら

表5 ハ名詞句の完全名詞句における RD 値の分布

RD	英語母語		中国語母語		韓国語母語		日本語母語	
	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%
1-2	61	41.8	210	44.7	96	46.4	58	54.7
3-8	24	16.4	70	14.9	30	14.5	13	12.3
9-14	8	5.4	10	2.1	7	3.4	2	1.9
15-19	1	0.7	4	0.9	1	0.5	2	1.9
20+	52	35.6	176	37.4	73	35.3	31	29.2
合計	146	99.9	470	100.0	207	100.1	106	100.0
平均 RD	8.7		9.1		9.2		7.5	
中央値 RD	4.0		4.0		3.0		2.0	

表6 ガ名詞句の完全名詞句における RD 値の分布

RD 値	英語母語		中国語母語		韓国語母語		日本語母語	
	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%
1-2	5	18.5	24	25.0	32	25.8	6	8.5
3-8	4	14.8	8	8.3	8	6.5	7	9.9
9-14	0	0.0	1	1.0	4	3.2	0	0.0
15-19	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
20+	18	66.7	63	65.6	80	64.5	58	81.7
合計	27	100	96	99.9	124	100.0	71	100.1
平均 RD	14.1		13.9		13.8		16.8	
中央値 RD	20+		20+		20+		20+	

ず、ハ名詞句では RD 値 1-2 が最も多く、RD 値 20+ が次に続くという系統性が見られるが、日本語母語話者は RD 値 1-2 の割合と RD 値 20+ の値が 25.5% 差あるのに対し、他の母語話者は、英語母語話者 6.2%、中国語母語話者 7.3%、韓国語母語話者 11.1% と差が小さいこと、中央値も日本語母語話者が 2 であるのに対し、母語が韓国語は 3、中国語と英語は 4 であり、日本語母語話者のハ名詞句の RD 値は 1-2 に多いことが特徴として示された。

一方、表 6 から、ガ名詞句については、全ての母語話者において RD 値が 20+ が最も多いという点では共通しているが、学習者群の RD 値が 20+ に 65% 前後、1-2 に 20 ~ 25% 前後と分散しているのに対し、日本語

母語話者は 20+ が 80% 以上であり、ガ名詞句の RD 値は 20+ に集中しているといえる。

以上のように日本語母語話者のハ名詞句は RD 値 1-2 に多く、ガ名詞句は 20+ に集中しているのに対し、学習者の RD 値は日本語母語話者に比べると分散している。このことから、学習者にとって、先行文脈の同一指示語との距離とハ名詞句とガ名詞句との関係（連鎖性）に難しさの一端がある可能性が考えられる。

5.2.2 有生性別にみた指示距離

前節と同様に、完全名詞句のみを対象として有生性の影響を分析した。完全名詞句のハ名詞句とガ名詞句を、Bekeš (1995) に従い、「人物」「有生物」「無生物」に分類したところ、本研究の対象作文では、どの母語話者も「有生物」の頻度が 0～7% と非常に少なかったため、「人物」と「有生物」を合わせて「有生」とした。「有生」の名詞句の 90% 以上は「人物」で占めている¹²⁾。

表 7 は、有生名詞句、無生名詞句の頻度と平均 RD 値をハ名詞句とガ名詞句に分けて母語別に示したものである。日本語母語話者の無生のハ名詞句の平均 RD 値が低いことと、有生のガ名詞句の平均 RD 値が突出して高いことが示されている。

表 7 有生名詞句と無生名詞句の頻度と RD 平均値

	ハ				ガ			
	有生		無生		有生		無生	
	頻度	平均 RD	頻度	平均 RD	頻度	平均 RD	頻度	平均 RD
英語	76	10.3	70	8.0	8	11.4	19	15.2
中国語	228	9.5	242	8.3	45	12	51	15.5
韓国語	98	9.0	109	7.8	61	13	63	14.4
日本語	36	11.4	70	5.5	18	17.1	53	16.7

まず有生のハ名詞句の RD 値とその頻度の分布を母語別にまとめると

表8のようになる。本研究の対象とした作文は、自国の行事を他国の人に説明するという設定であったためか、全ての母語話者において、有生名詞句は「子ども／大人」「人々」「女性／男性」「〇〇人」のような特定されない一般の人々を指すことが多いという点で内容的に共通していた。これらの名詞句は、特定する必要がないため指示対象を探索する必要がなく、また常に身の回りに存在し、準活性化されていると考えられる対象であるため、初めから八名詞句で導入される（RD=20+）ことが多い。

表8 有生の八名詞句（完全名詞句）における RD 値の分布

RD 値	英語母語		中国語母語		韓国語母語		日本語母語	
	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%
1-2	24	31.6	85	37.3	44	44.9	10	27.8
3-8	15	19.7	46	20.2	16	16.3	6	16.7
9-14	6	7.9	8	3.5	3	3.1	2	5.6
15-19	0	0.0	2	0.9	0	0.0	1	2.8
20+	31	40.8	87	38.2	35	35.7	17	47.2
	76	100.0	228	100.1	98	100.0	36	100.1
平均 RD	10.3		9.5		9.0		11.4	
中央値 RD	8.5		5.0		3.0		13.0	

しかし、日本語母語話者の有生の八名詞句が RD=20+ に半数近く集中し、中央値 RD が高いのに対し、学習者群は、RD=1-2 と RD=20+ に八名詞句が分散している。その原因の一つとして、同じ指示対象が、日本語母語話者の場合は1つの作文に1回か多くても2回しか八名詞句として出てこないのに対し、学習者群では、1つの作文に同じ指示対象を表す八名詞句が2回以上繰り返し出てくること挙げられる。2回目以降の産出は、先行文脈に既に提示されているため RD 値が低くなり、結果的に低い RD 値の頻度が高くなったと考えられる。日本語母語話者と学習者による有生の八名詞句の導入のされ方に相違があることが見出された。

次に無生の八名詞句の RD 値とその頻度の分布を表9にまとめた。どの母語話者も RD=1-2 が多いが、特に日本語母語話者は70%近くの無生

表9 無生のハ名詞句（完全名詞句）における RD 値の分布

RD 値	英語母語		中国語母語		韓国語母語		日本語母語	
	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%
1-2	37	52.9	128	52.9	57	52.3	48	68.6
3-8	8	11.4	24	9.9	14	12.8	6	8.6
9-14	3	4.3	2	0.8	3	2.8	1	1.4
15-19	1	1.4	2	0.8	1	0.9	1	1.4
20+	21	30.0	86	35.5	34	31.2	14	20.0
	70	100.0	242	99.9	109	100.0	70	100.0
平均 RD	8.0		8.3		7.8		5.5	
中央値 RD	2.0		2.0		2.0		1.0	

名詞句が RD=1-2 で提示されており、平均 RD も低い。

無生主語は主に、行事の名称や行事にまつわる固有の名詞として提示されることが多かった。日本語母語話者の作文では、外国の人が知らないと思定した行事や行事に関する名詞句を、読み手にとって活性化された状態の情報にするために、一旦先行する文脈に述語等主語以外の文成分によって登場させていることが多い。そのため、先行文脈との連鎖性が高いという結果が出たと考えられる。

一方、学習者の作文では、無生である行事や行事にかかわる指示対象が最初からハ名詞句として提示されることが見られた。特に、平均 RD 値が最も高く、RD=20+ が多い中国語母語話者は、「月餅」「中秋節」などの中国の行事にかかわる名詞句や「楽隊」のような読み手の日常的な文脈の中で活性化しているかどうか不明な名詞句が初めからハ名詞句で導入されている。他の母語話者も「釜山国際映画祭」（韓国語）、「かんしゃさい」（英語）などの行事の名前が初めからハ名詞句で導入されていた。一方、日本語母語話者では行事の語彙が初めからハ名詞句で導入される例は見られなかった。

有生性別にみた RD 値からは、同一指示語をどの程度ハ名詞句として繰り返し使用することが適切なのか、また最初からハ名詞句で提示できる名詞の内容的な制約が、談話におけるハ名詞句とガ名詞句の導入のポ

イントとして示された。

また、本研究の日本語母語話者の結果を、朝日新聞の記事を分析した Bekeš (1995) の結果と比較すると、Bekeš では無生は格助詞が使用されることが多いという結果が出ているのに対し、本研究では無生はハが使用される頻度が高いという結果になった(表7)。Bekeš の対象とした新聞記事が人物の行動を中心に展開されている一方、本研究が分析対象とした作文のテーマは、「国の行事」であることが、結果の違いに反映されたと考えられる。有生性よりもどのような情報にそって話が展開しているかによって、トピック性が左右される可能性が考えられる。

6. 考察のまとめと今後の課題

本研究では日本語学習者が主語名詞句をどのように談話に導入しているかに注目し、日本語母語話者の運用と比較することにより、以下のような傾向が見られた。

(1) 学習者の母語は、日本語作文におけるハ名詞句とガ名詞句の使用頻度に影響を与える。日本語とトピックの表現手段が近似の韓国語を母語とする学習者は、1つの作文内でハ名詞句とガ名詞句を使う頻度の割合が日本語母語話者の分布に近いのに対し、類型論的に日本語と異なる言語の英語と中国語を母語とする学習者は、ハ名詞句を多用する傾向が見られた。

(2) 日本語学習者も日本語母語話者同様、ハ名詞句のほうがガ名詞句より先行文脈との連鎖性が強く、トピック性が高い指示対象として認識している。しかし、日本語学習者は、日本語母語話者ほど指示距離とハ／ガの関係が明確ではない。その原因として、学習者群は、同じ指示対象を繰り返しハ名詞句で談話に導入するなど、日本語母語話者とハとガの導入に関する談話スタイルの違いが見られた。

日本語母語話者の談話スタイルは、<2> のような談話に典型的に現れている。

<2> この日本の事情を一番反映している行事といえば、／私は結婚式であると思う。／今の日本の結婚式はまさに神社でもお寺でも教会でも行われるのである。／しかし、一番スタンダードな結婚式は大きなホテルで行われる。／ホテル内に神棚や教会が設置され、／神主や神父が式を行い、／そしてその後はそのままひろう宴とホテル内を移動する。(JP-23)

* 下線はハ名詞句、下線はガ名詞句を示す。

「結婚式」という指示対象がまず焦点として第1文に現れ、次の文で「結婚式ハ」というハ名詞句が談話のトピックとして導入され (RD=1)、維持されていく。「神棚や教会」「神主や神父」というガ名詞句は、初出 (RD=20) であるが、先行文脈のハ名詞句「結婚式」や「神社」「お寺」「教会」を手がかりに準活性化され、明確な内容として導入される。ハ名詞句の「結婚式」は、<2> の文章の後、JP-23 の作文の最後の節まで維持された。一方、ガ名詞句の「神棚や教会」「神主や神父」は1回限りの出現であった。ハ名詞句が談話全体を通して存在したのに対して、ガ名詞句は命題内に内在している。この関係は、砂川 (2005)、メイナード (2004)、Langacker (2008) らが示した大局的に捉えたトピックと主語の関係を示している。過程的で局所的な指示対象の連鎖性が、遡及的で大局的なトピックの捉え方も密接にかかわっていることが示されており、両者ともにハとガを使い分けるための重要な認知的概念であることが示されている。ハとガの導入には、記憶にかかわる情報の活性化度と談話全体のトピックと命題の関係の両者の知識が必要であると考えられる。

以上のことから、類型論的に日本語と異なる言語を母語とする学習者にとっては、ハとガの両方を同時に使い始めることが難しいこと、また、学習者の母語にかかわらず、ハ名詞句が談話全体に機能し、ガ名詞句が

その下位の命題内で機能するという、文脈とハ／ガの関係性を習得することが難しいことが示唆された。談話レベルでのハとガの関係は、談話内の1つのまとまりがどこからどこまで維持されるのか、また情報の活性化状態、つまり指示対象の想起のしやすさがどの程度なのか、構造として見えにくいいため、難しさがどこにあるか特定しにくかった。しかし本研究では実際に産出されたデータを対象に、想起のしやすさ（記憶）という認知的側面からの定量的リサーチを行うことで、主語のハ名詞句、ガ名詞句の談話への導入の仕方には、談話がどのような構造で進行しているかを把握することに難しさの一端がある可能性が示唆された。

今後の課題として、本研究ではハとガに焦点を当てたが、ゼロ照応による主語名詞句の導入も今後合わせて分析していくこと、また、本研究のデータでは学習者のレベルが確定できなかったが、今後レベルが明確なデータや縦断的データを用いることが挙げられる。そうすることで進行する談話の構造の把握をどのように習得していくかというプロセスを更に詳しく明らかにし、日本語教育への示唆を得たい。

注

- 1) 本稿では、言語全般を対象に一般的に topic と呼ばれているものを「トピック」と記し、日本語のハで標示される名詞句を「トピック」とは区別して「主題」と表す。ただし先行研究を紹介する場合は先行研究で使用されている表現を用いる。
- 2) 本稿では、<名詞句+ハ>を「ハ名詞句」、<名詞句+ガ>を「ガ名詞句」と表わした。
- 3) 「人間」は最も有生性が高いカテゴリーであり、「有生」というのは、人間以外の有生物を指す。「無生」は最も有生性が低いカテゴリーである。
- 4) Langacker, R.W. (2008) の山梨訳を参考に、'full NP' を「完全名詞句」とした。名詞句が指示代名詞や指示詞を含まず、その語自体で意味をもつ名詞で構成されているものとした。
- 5) Sasaki (1997) では 'Decay' という語が使用されているが、TP と同じ指標を

指す。

- 6) 本研究では、先行文脈に現れている情報を「活性化情報」、先行文脈に現れていないが急に提示されても指示対象を特定できる情報を「準活性化情報」、先行文脈に現れておらず、急に提示されると指示対象が同定されにくい情報を「不活性化情報」と捉えた。Jarvis (2002) による「新情報」は不活性化情報、「継続中の情報」は活性化情報、「再導入された名詞句」は準活性化情報にあたると思われる。
- 7) 国立国語研究所日本語教育基盤情報センターが作成した「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース/日本語学習者による日本語発話と、母語発話との対照データベース/作文添削システム XECS」を利用した。
- 8) 「作文対訳 DB」にはいくつかの共通したテーマが設定されている。
- 9) 韓国語母語話者の作文以外は、DB 中で条件を満たすもの全てである。韓国語母語話者の作文は数が多かったため、最も数の多い中国語母語話者の作文数と同数をランダムに選出した。
- 10) 英語はアメリカ、シンガポール、中国語は中国、韓国語は韓国、日本語は日本である。
- 11) 対象とした学習者の日本語学習期間の平均は、英語母語話者が 31 カ月、中国語母語話者 15 カ月、韓国語母語話者 24 カ月である。
- 12) 「有生物」中の「人物」の割合は、ハ名詞句では、英語 100%、中国語 98%、韓国語 95%、日本語 100% である。同様にガ名詞句では、英語 100%、中国語 93%、韓国語 95%、日本語 100% が「人物」である。

参考文献

- 久野障 (1973).『日本文法研究』東京：大修館書店
- 砂川有里子 (2005).『文法と談話の接点—日本語の談話における主題展開機能の研究—』東京：くろしお出版
- 野田尚史 (1996).『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』東京：くろしお出版
- 野田尚史 (2004).「主題の対照に必要な視点」、益岡隆志編『主題の対照』(pp. 193-213), 東京：くろしお出版
- 益岡隆志編 (2004)『主題の対象』東京：くろしお出版
- 八木公子 (2000)「「は」と「が」の習得 - 初級学習者の作文とフォローアップイ

- ンタビューの分析から』『世界の日本語教育』10: 91-107
- メイナード, 泉子.K. (2004). 『談話言語学』 東京: くろしお出版
- Bekeš, A. (1995). 「文脈から見た主題化と『ハ』」 益岡隆志・野田尚史・沼田善子編『日本語の主題ととりたて』 (pp. 155-174), 東京: くろしお出版.
- Chafe, W. L. (1987). Cognitive constraints on information flow. In Russell S. Tomlin (Ed.), *Coherence and grounding in discourse* (pp.21-51). Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Chafe, W. L. (1993). Prosodic and functional units of language. In Jane A. Edwards and Martin D. Lampert (Eds.), *Talking data: transcription and coding in discourse research* (pp.33-43). NJ: Lawrence Erlbaum associates.
- Chaudron, C. & Parker, K. (1990). Discourse markedness and structural markedness: The acquisition of English noun phrases. *Studies in Second Language Acquisition*, 12, 43-64.
- Givón, T. (1983). Topic continuity in discourse: an introduction. In T. Givón (Ed.), *Topic continuity in discourse: a quantitative cross-language study* (pp.5-41). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Givón, T. (1984). Universal of discourse structure and second language acquisition. In William E. Rutherford (Ed.) *Language universals and second language acquisition* (pp.109-139). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Givón, T. (1988). The pragmatics of word-order: predictability, importance and attention. In Michael Hammond, Edith Moravcsik, and Jessica Wirth (Eds.), *Studies in syntactic typology* (pp.243-283). Amsterdam: John Benjamins.
- Givón, T. (1989). The pragmatics of anaphoric reference: Definiteness and topicality. In T.Givón (ed.), *Mind, Code and Context- Essays in pragmatics*, (pp.205-235). N.J.: Lawrence Erlbaum Associate.
- Givón, T. (1995). *Functionalism and grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Jarvis, S. (2002). Topic continuity in L2 English article use. *Studies in Second Language Acquisition*, 24, 387-418.
- Langacker, R. W. (2008). *Cognitive grammar: a basic introduction*. New York: Oxford University Press. (山梨正明監訳 2011 『認知文法論序説』 東京: 研究社)
- Li, C. N. & Thompson, S. A. (1976). Subject and topic: A new typology of lan-

- guage. In: Charles N. Li (Ed.), *Subject and topic* (pp.457-489). UK: Academic Press.
- Myhill, J. (1992). *Typological discourse analysis: Quantitative approach to the study of linguistic function*. MA: Blackwell.
- Nakagawa, N., Yokomori, D., & Asao, Y. (2010). The short intonation unit as a vehicle of important topics. *Paper in Linguistic Science*, 16, 111-131.
- Odlin, T. (1989). *Language Transfer*. UK: Cambridge University Press.
- Sasaki, M. (1997). Topic continuity in Japanese - English interlanguage. *IRAL*, 35/1, 1-21.